

宝雨経をめぐる若干の考察

滋野井 恬

「本経が何故に武周革命の資助たりしかは今明文を闕く」とし乍らも、同経卷三の菩薩の現逆を説く部分、すなわち

西暦六百年代の末に中国へ入った訳経家達摩流支（菩提流志）によつて、長寿二年（六九三）に訳出された經典の中に宝雨經十卷が有る。仏が止蓋菩薩に対して菩薩行の一々について詳細に説き明かすという結構になつてゐる。この宝雨經について、時の政情と關係が有ると考えられる要素が存在することを矢吹慶輝博士が公けにしておられる。いま、氏の所説のおよそを記すに、次の如くである。

先ず、

則天武后時代に「金仙降旨、大雲之偈先彰、玉宸披祥、宝雨之文後及」「大雲発其遐慶、宝雨兆其殊禎」と言われており、武后の革命（武周革命）と宝雨經とに縁由有つたものと考えられる。果たせるかな、大雲經を表進して革命翼賛につとめた薛懷義・法明の徒輩が宝雨經訳出に参加している。

ということを指摘し、しこうして、

云何菩薩除遣惡作方便善巧、謂此菩薩見諸有情造無間罪、及起一切諸不善業、失心憂悔菩薩往彼作如是言、善男子、云何失心憂悔而住、彼有情言、大士、我造無間諸不善業、恐於長夜受諸苦惱、無利益故、不安樂故、以是因緣失心憂悔、是時菩薩為彼有情広説正法、令深悔過受菩薩戒、若此有情未能悔過、是時菩薩欲令彼人心生信伏、為現神通広説彼人思惟之事、有情由是於菩薩所生信伏心歡喜信樂、生信樂已根性成熟、菩薩為彼広説妙法、彼人即能順領受、菩薩又復於彼人前化作父母説如是言、汝可觀之、我即是汝同伴丈夫、汝莫悔過此所造業、畢竟不墮捺洛迦中、亦不退失利益安樂、如是説已、即便殺所現父母、菩薩於彼有情之前示現神變、彼人思惟、有智之者尚殺父母不失神通、況我無智而造此業、墮捺洛迦退於利樂、爾時菩薩為彼有情演説妙法、令其惡業漸得微、猶如蚊翼、是名菩薩除遣惡作方便善巧

の文を挙げ、次いで、懷義一派のやり口から推して「右の經文の如きは特に武后の非違を弁護するに頗る切実の文字とす

べし」と述べるなどしている。

右の次第によつて見るに、矢吹博士は、この現逆が武后にとつて、己が非を弁護してくれるものとして喜ばれたものと解したようである。

武后政権が成立するまでの過程や、革命以後における種々の動きを見るに、非常手段と雖も、見方によつては容認されるべきものであるとの説を経文中に存するということは、武后一派にとつて都合のよいものであることは否定すべくもない。しかし、こうしたことが、宝雨経が大雲経とともに重んぜられた理由と解するのはいささか不安である。

そもそも、宝雨経はいわゆる単訳経ではなく、本経の他に、梁・曼陀羅仙訳の宝雲経七巻及び曼陀羅仙・僧伽婆羅共訳の大乗宝雲経七巻、宋・法護の除蓋障菩薩所問経二十巻というような三通りの訳が存しているのである。これら諸本は、いちおう、同本異訳とされるのであるが、原本それ自体が幾らか違つていたものらしく、四本を対照して見ると、内容に若干の出入が存している。しかし、菩薩の現逆のことは、矢吹博士も指摘されるが如く、宝雲経や大乗宝雲経にも見られる要素であつて、なにも、唐訳において初めて見られる要素ではない。ただ、ここに挙げた二本と唐経との間には文章の長短があり、唐経が最も長文である。そうは言つても、経文全体の分量から見ると、唐経にて特に菩薩の現

逆を詳説したととれないのである。説述の内容をもつても、そのことが言えよう。

このように見てみると、「現逆云々」ということが、宝雨経が大雲経と並びもてはやされる理由であつたとは考えられなくなるのである。革命に関係づけられるのは、これとは別の部分ではなかつたらうかと推測される所以である。しかれば、より妥当性が有ると考えられる部分はどこかというに、それは、宝雨経の初めに在る所の月光天子に関する一文である。以下これについて述べてみよう。

二

先にも若干述べた如く、法雨経の四訳を対照して見るに、内容に異同出入が有ることは事実である。しかして、その出入の場合、ある要素が、四本中三本に有つて一本には欠くというような場合と、四本中三本に無くして一本にのみ存在するというような場合とが有る。当面の問題においては、後者の場合に留意せねばならない。何故ならば、四本中一本に欠くということは有りがちであるが、四本中一本にのみ存するということは、前の場合よりも不自然さが大きいからである。

さて、このようなことを前提として見てゆくに、唐経には他の三本にはその痕跡すら存しない所の要素が含まれている

ことが知られる。もつとも、梁経よりも唐経の方が内容が増していても不思議はないのであるが、唐経において初めて見られた要素が、より内容の多い宋経においてはその痕跡すら存しないということに留意すべきである。以下、このことについて眺めてゆくこととする。

先ず、説明の都合上、問題となる部分を原文のまま、その前後を要約して記すに、次のようである。

仏、伽那山頂に大苾芻衆七万二千人とともに在しませり。又、八万四千の一生補処の菩薩や賢護菩薩を始めとする十六善大丈夫あり、無量百千の諸竜王子・諸竜王采女等ありて仏を圍繞す。時に世尊、頂上より大光明を放って衆会を蔽いたまう。その光普ねく十方一切世界に満ちたり。

爾時東方有一天子名日月光、乘五身雲來詣仏所、右邊三匝頂礼仏足退坐一面

仏告天曰、汝之光明甚為希有、天子、汝於過去無量仏所、曾以種香花珍宝嚴身之物衣服臥具飲食湯藥、恭敬供養種種諸善根、天子、由汝會種無量善根因縁、今得如是光明照耀天子、以是縁故、我涅槃後時分、第四五百年中法欲滅時、汝於此瞻部洲東方摩訶支那国、住居阿鞞跋致、實是菩薩故現女身為自在主、経於多歳正法治化、養育衆生猶如赤子、令修十善能於我法广大住持建立塔寺、又以衣服飲食臥具湯藥供養沙門、於一切時常修梵行、名日月淨光天子、然一切女人身有五障、何等為五、一者不得作転輪聖王、二者帝釈、三者大梵天王、四者阿鞞跋致菩薩、五者如來、天子、然汝

於五位之中當得二位、所謂阿鞞跋致及輪王位、天子、此為最初瑞相、汝於是時受王位已、彼国土中有山涌出五色雲現、當彼之時、於此伽耶山北亦有山現、天子、汝復有無量百千異瑞、我今略説、而彼国土安隱豊樂人民熾盛甚可愛樂、汝応正念施諸無畏、天子、汝於彼時住壽無量、後當往詣觀史多天宮、供養承事慈氏菩薩、乃至慈氏成仏之時、復當与汝阿耨多羅三藐三菩提記

爾時月光天子、從仏世尊聞授記已、踊躍歡喜身心泰然、從座而起躡七匝頂礼仏足、即捨宝衣嚴身之具、奉上於仏作如是言、世尊、我於今者親在仏前得聞如是本末因縁、授阿耨多羅三藐三菩提記已獲大善利、作是語已躡三匝退坐一面

その時、東方殑伽沙世界を過ぎて世界あり。蓮花と名づく。その仏、蓮花眼如來応正等覚明行円満善逝世間解無上丈夫調御士天人師仏薄伽梵と号す。釈迦牟尼如來の放たれし光明その国に至るや、大衆の歡喜倍増す。この国に止蓋菩薩あり、蓮花眼如來のもとに至りてその故を問ひ、釈迦牟尼仏のことを教えられて索迦世界に至りて多くの問を發す

とあつて、以下止蓋菩薩の問に答えるという形でもつて一千の法門が開示されるのである。

右に原文で掲げた部分は、唐経においてのみ存する要素である。他本に見られぬ要素であるということも問題であろうが、かかる一段が在存することは、教説の進め方から言つても不自然である。

ところで、原文部分を見るに、次のような文が見つかるの

である。

第一は「我涅槃後最後時分、第四五百年中、法欲滅時、汝於此瞻部洲東北方摩訶支那国、位居阿鞞跋致、實是菩薩故現女身為自在主」というのであり、第二は、「然一切女人身有五障、何等為五、一者不得作轉輪聖王、二者帝釈、三者大梵天王、四者阿鞞跋致菩薩、五者如來、天子、然汝於五位之中當得二位、所謂阿鞞跋致及輪王位」である。第三に「彼国土中有山涌出」であり、第四に「後當往詣觀史多天宮、供養承事慈氏菩薩、乃至慈氏成仏之時、復當与汝阿耨多羅三藐三菩提記」である。次に、これらの一々について、何故問題となるかを述べて見よう。

第一の、瞻部洲の東北方摩訶支那国に女性として出現し、正法もて治めるといふことは大いに注意を要するのである。何故かというに、瞻部洲の東北方摩訶支那国といふのは中国のことに他ならない。仏典中にかかる国名が登場すること自体が問題になるのみならず、訳出当時、中国にては武周革命が行なわれていて、中国史上、空前絶後の女帝——則天武后——が君臨していたという事実が存在するからである。

高祖・太宗・高宗と承継がれてきた唐室が、たとえ一時なりとは言え武后によつてとつて代られたといふことの裏には、政治的・社会的な面において大きな事情が存したこと申すまでもない。しかし、当時の事情がいかにあるうと、武后

宝雨経をめぐる若干の考察（滋野井）

は女人の身である。中国の伝統から言つて、女性の身をもつて中国に君臨することは、有り得べからざることなのである。かかる障碍を乗り越えんとしているいろの策が構ぜられたこと、広く人々の知る所である。女主君臨を正当づけるかの如き大雲経の文——「以女身当王国土（曇無讖訳大方等無想経では卷四に存する）——を取り上げて大いに宣伝した如き、その最たるものである。大雲経が女帝君臨の道を開いたものとして重んぜられたことは、大雲経寺設置のいきさつから明らかである。宝雨経は女帝君臨の道を開いたわけではない。何となれば、革命後の訳出だからである。しかし、宝雨経にも女主君臨のことが説かれている。しかも、時は第四の五百年^③、所は中国と明言しているといふことは、武后やその周囲の人々にとつて、まことに好都合なものとせねばなるまい。武后におもねる人々が、新規訳出に際して、女帝君臨という事実の上に立つて手を加えたのではないだろうか。或は、武后の意を承けて、このように細工したのであつたかも知れないのである。

次に山の涌出のことである。

垂拱二年（六八六）十月、新豊郡東南に山が涌出し、武后は瑞象であると言つて、地名を慶山県と更めているが、宝雨経^④訳出は、この数年後のことである。新山湧出のことは、矢吹博士が注目されたところの、いわゆる武后登極讖疏^⑤の中にも

引用されている。当時、よく知られていたものであろう。新山湧出という天変を経文の中に採り入れて、或る種の目的に利用したのであろうと考えることも、あながち無理ではあるまい。

月光天子のことと言い、山のことと言い、女帝登極が仏の懸記にかなつたこととして喧伝するに好都合であること、大雲経と軌を一にするものである。宝雨経が大雲経と並びもてはやされたのは、こうした所に根拠が有つたのではないだろうか。

更に、輪王位を得るといふ条である。

武周時代において、武后の称号はしばしば変更を見ているが、長寿二年（六九三）九月乙未に、武承嗣らが「金輪聖神皇帝」の号を用いられんことを願い出たのを聴し、それとともに、金輪等七宝を作つている。金輪が、輪王と密接な関係をもつものであること、ここに多言を弄することもあるまい。尊号を進めた人々の中心に居た武承嗣は武后の一族である。しこうして、「輪王位を得る」と説いた宝雨経の訳了は、加号を願ひ出る数日前のことである。経文中に「輪王位云々」の語が有ることを知つた武承嗣等が、一芝居打つたのではないかと考えられるのである。

最後に、月光天子が觀史多天宮に往詣するといふことである。

薛懷義等が、武后を弥勒の化身と言ひふらしたことはあまりにも有名である。また、宝雨経訳出後になつて、武后と弥勒とを結びつけることが著しく表面化してくるのであるが、こうしたことを眺める時、「觀史多天云々」の文も、軽々しく扱ふことが許されないように思われるのである。

三

上述の四項は、いささか我田引水的な見解と考えられるかも知れないが、このように解釈するには理由が有る。

宝雨経の訳者は達摩流支となつてゐるが、この時、薛懷義が監訳に當つてゐた。薛懷義の事跡は旧唐書卷一八三の同人の伝に詳しいが、武后時代の偽濫僧の筆頭に挙げられる人物で、武后の寵愛を利用して、さまざまの非法を行なつてゐるのである。その一端を示すものとして、次のような例が有る。

大谷大学所蔵の敦煌古写経の中に阿毘曇經なる尾題をもつものがあり、その跋に「法明訳 懷義校云々」なる文字が記されている。

一見、法明が訳して懷義がそれを校したかに見えるが、実はそうでない。法明訳阿毘曇經と称されるものは、前秦の僧伽提婆・竺仏念共訳の阿毘曇八健度論であり、秦経の品末に見られる所の「梵本一百八十四首 秦一千六百六十四言」

なる記述の、梵を胡と改ため、「秦」字を抜くと言つた類の細工を施したものである。つまり、已に漢訳されていた經典を、あたかも法明が新規に訳し、懷義が校したかの如くに見せかけるという恥知らずな行為をすら敢えて爲したのである。

右のような事を考える時、宝雨經に曲筆が行なわれたのではないかという疑も、けだし自然なものとなるであろう。

問題は以上に尽きたわけではない。宝雨經の訳場に連なつた人々を見ると、經文に舞文曲筆が行なわれても不思議ではないような感を強められるのである。

宝雨經の訳場列位（敦煌出土、S二二七八による）は

大白馬寺大德沙門懷義監訳

南印度沙門達摩流支宣釈梵本

中印度王使沙門梵摩兼宣梵本

京濟法寺沙門戰陀訳語

仏授記寺沙門慧智訳語

仏授記寺沙門道昌証梵文

天宮寺沙門達摩難陀証梵本

大周東寺都維那清源泉開国公沙門処一筆受

仏授記寺都維那昌平泉開国公沙門徳感筆受

仏授記寺沙門思玄綴文

長壽寺主沙門知激綴文

宝雨經をめぐる若干の考察（滋野井）

仏授記寺都維那贊皇泉開国公沙門知静証義

大周東寺都維那予章泉開国公沙門恵儼証義

天宮寺上座沙門知道証義

大周東寺上座江陵泉開国公沙門法明証義

長壽寺上座沙門知機証義

大奉先寺上座当陽泉開国公沙門慧陵証義

仏授記寺沙門神英証義

仏授記寺主渤海泉開国公沙門行感証義

京西明寺沙門円測証義

婆羅門僧般若証義

婆羅門臣李無諂訳語

婆羅門臣度破具写梵本

鴻州慶山泉人臣叱于智蔵写梵本

婆羅門臣迦葉烏担写梵本

婆羅門臣条利烏台写梵本

尚方監匠臣李審恭装

專当典并写麟台楷書令史臣徐元処

專当使文林郎守左衛翊二府兵曹參軍臣傅守真

勅檢校翻經使典司賓寺府趙思泰

勅檢校翻經使司賓寺録事撰丞孫承辟

となつてゐるのである。

これらの人々のうち、某泉開国公となつてゐる僧は、大雲經疏作成に関係有りと目されること、矢吹博士の指摘された

ことであり、今更多言を要すまい。しかし、訳場参加者その他については、更に次のようにつけ加えることができよう。

諸僧の住寺として、大周東寺とか、仏授記寺・大奉先寺とかが出てくるが、この寺々は、武后若しくは薛懷義と因縁浅からぬものである。先ず大周東寺であるが、この寺は洛陽に在つた寺で、武後の母楊氏の旧宅を、武後の意志によつて寺としたものであつた。¹³次に、仏授記寺については、次のように言われている。

洛陽において高宗武太后のために敬愛寺が建てられていたが、懷義がその内に別殿を作り、仏授記寺と称した。¹⁴

と。また、大奉先寺であるが、この寺は、竜門の大奉先寺ではないであろうか。若し然りとせば、次の如き事情が存するのである。

高宗皇帝の時、勅して竜門に大毘盧舍那像を造らしめたが、皇后武氏（則天武后）は、二万錢を以つてその功を助けた。調露二年（六八〇）、大像の南に大奉先寺を勅建した云々。¹⁵

更に長寿寺に關して言えば、唐会要卷四八に「長寿元年、武后称齒生髮變、大赦改元、仍置長寿寺」という記載が見られるのである。これまた、武后と因縁深い寺とせねばなるまい。

右のような寺に籍を置く僧達が、武后や懷義と没交渉であつたとは考えられない。仏授記寺徳感の如きは高僧としてそ

の名を宋高僧伝に載せられており、処一・行感等も、菩提流志（達摩流支）の二〇部に上る經典訳出に當つて、筆受その他の重責を荷つているなど、いずれも、当時、世間に名を知られた人々ではある。しかし、有名な僧であればなお更、ある目的の為に利用される可能性が大きいとも言えよう。或は自らの意志で名聞を求めて行動していたのかも知れない。

他に鴻州慶山県の人叱于智藏が注目される。この人の詳細は不詳であるが、その出身地たる鴻州慶山県というのは、先に述べた所の新山涌出の地に他ならないのである。旧唐書地理志の記述によると、新豊県（慶山県）は、天授二年（六九二）から約一〇年間鴻州に属していたことである。宝雨経の文中に新山湧出ということを盛り込んだのは、この人の細工であつたかも知れない。

以上、宝雨経の訳場に連なつた人々の周辺を眺めて見たわけであるが、それによつて、本経に舞文曲筆が加えられる可能性が小さくないことが知られるであろう。こうした人々が介在するところに、宝雨経の異状部分が作り出されたものと考えるのである。

宝雨経が武周革命と關係をもつことは、己に先学によつて説述されたことではあるが、今、ここに、先学が着目されたのとは別の部分を採り上げて、本経にまつわる問題を指摘し、あわせて武周時代の仏教の一面を窺つた次第である。

新刊紹介

宮坂宥勝著「仏教の起源」

序 説 仏教興起時代の種族社会

第一章 種族社会の遺制

第二章 残存種族

第三章 種族社会と仏教の起源

第四章 古代インド文化と初期仏教の成立

第五章 初期仏教と密教の発祥

第六章 初期仏教の文化史的考察

A5判 本文四八五頁
山喜房仏書林刊 定価 七五〇〇円

- 1 「三階教の研究」七四八ページ以下。
- 2 「仏書解説大辞典」、除蓋障菩薩所問經の項参照。
- 3 同博士、前掲書。七五五ページ。
- 4 矢吹博士前掲書。塚本善隆博士、国分寺と隋唐の仏教政策並びに官寺（日支仏教交渉史研究、所収）等参照。
- 5 当時、中国仏教界では、仏滅後一五〇〇年を過ぎ、第四次の五〇〇年に入ったと意識していた。
- 6 「旧唐書」卷三七・五行志。同書卷三八・地理志。「新唐書」卷四・武后本紀。
- 7 本疏製作は天授元年（六九〇）と推測される。疏文は「三階教の研究」に収められているが、敦煌出土のスタイン本六五〇二号は、同種であり、しかも、より長文である。
- 8 「新唐書」卷七六、則天順聖皇后伝。
- 9 証聖元年（六九五）正月に慈氏越古金輪聖神皇帝と号した。また、この月に明堂が炎上したことについて「弥勒成道の瑞である」と言った者が居る。
- 10 法明は大雲經疏の作成や宝雨經訳出に当って、阿毘曇經の時と同じく懷義とともに名を出しているが、提雲般若や義浄の訳場に連なって証義の責を果たした人物である。人物のほどはさておき、かなりの学匠であったと思われる。薛懷義に利用され、操られたのではなからうか。
- 11 野上俊静博士、敦煌本阿毘曇經卷廿六の跋について（大谷大学所蔵敦煌古写経、所収）参照。
- 12 「開元釈教録」卷九。「唐会要」卷四八・寺。
- 13 「旧唐書」卷一八三・薛懷義伝。

宝雨經をめぐる若干の考察（滋野井）